

分娩後に発症した慢性会陰部疼痛に エイトが奏功した一例



日本医大付属病院
女性診療科・産科

准教授 桑原 慶充先生



【症例】

25歳 女性

【既往歴】

特記事項なし

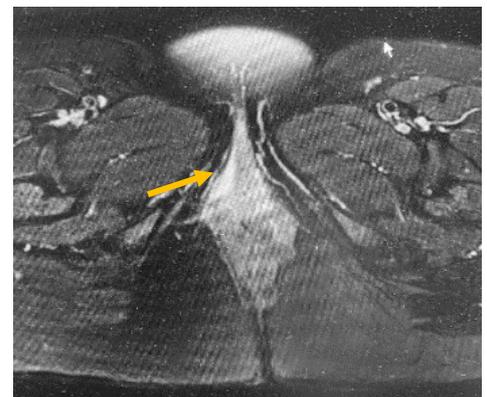
【現病歴】

- ・妊娠31週時 前医での妊婦健診を受け著変なく経過、里帰り分娩目的で帰省となる。
- ・妊娠33週時 腹痛が出現し、陣痛の発来が見られたため高次施設に搬送となる。搬送した同日に経膣分娩に至るも、分娩第二期に医師によって行われた用手的な分娩誘導の痛みがトラウマとなる。
- ・産後0か月目 会陰部疼痛が持続し、右太腿に痺れを感じるようになる。
- ・産後10か月目 精査加療目的で当科紹介で受診となる。

【現症】

産後10か月目 当科初診

内診および経膣超音波検査上、器質的異常は認めず。
経膣入口部より1cmほど奥の右壁に
恥骨下縁から肛門側まで幅広く疼痛・圧痛を認めた。



【検査】

骨盤MRI検査では、明らかな器質的異常を認めなかった。疼痛部位近傍にT2W1高信号域が脂肪抑制像で確認されたが、病的意義は不明であった。

【臨床経過①：漢方療法】

漢方療法開始

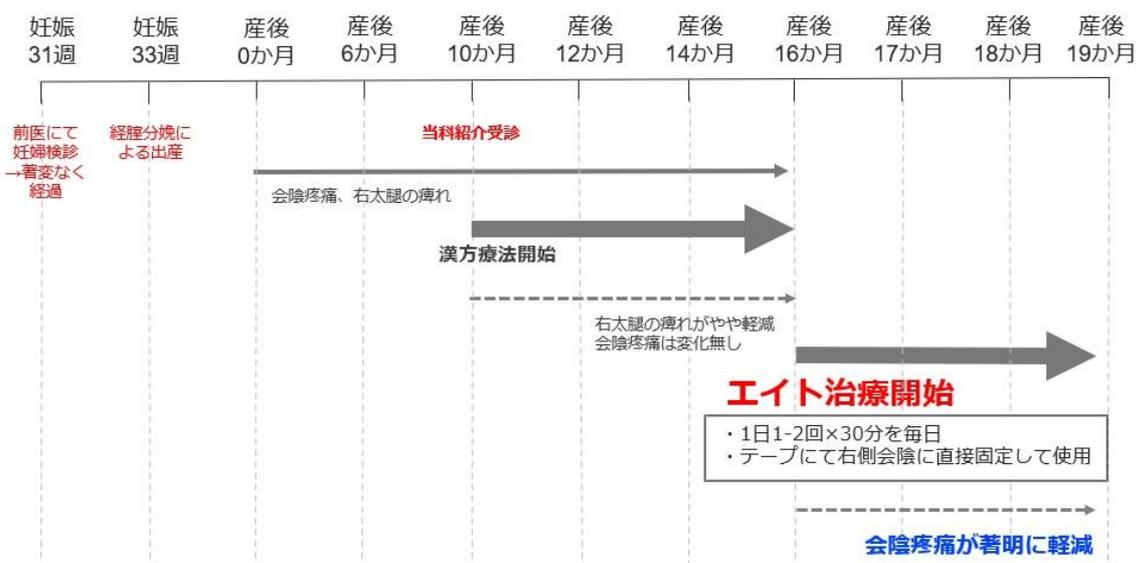
原因不明の会陰部痛への効能が知られる漢方療法（八味地黄丸）を開始したが、4ヶ月後の時点で、足の痺れ感はやや軽減したものの、会陰部疼痛は変わらず継続していた。

【臨床経過②：エイトによる治療】

エイトによる治療開始

半年経過した時点で漢方療法を中止し、エイトによる治療を導入した。開始より3か月经過した時点で、会陰部疼痛は著明に軽減し、自覚は違和感程度となっていた。現在も、本人のご希望でエイトによる治療を継続し、外来フォロー中である。

経過



【結語】

原因不明の慢性会陰部疼痛は、幅広い年齢の女性に認められる病態である。治療に難渋する場合には、エイトを新たな治療選択として提示できるものと考えられた。

薬事情報

販売名：エイト

承認番号：30400BZX00015000

一般的名称：交番磁界治療器

医療機器クラス分類：クラスII

(管理医療機器 特定保守管理医療機器)

株式会社P・マインド

〒861-5525

熊本県熊本市北区徳王2-8-6

TEL 050-3160-8350

MAIL contact@p-mind.co.jp